

## *Absalom, Absalom!*における Faulkner の語りの技法(Ⅲ) Faulkner's Narrative Technique in *Absalom, Absalom!* (Ⅲ)

重 迫 和 美  
Kazumi SHIGESAKO

The purpose of this series of papers is to clarify Faulkner's unique narrative technique in *Absalom, Absalom!*. The uniqueness of Faulkner's technique consists of three devices which seem to be inconsistent with each other: ①to make the readers identify themselves with Quentin and appreciate the Sutpens' drama, ②to highlight the difference between the readers' and Quentin's information about the Sutpens' secret and make the readers try to solve the mystery on their own, and ③to make the readers have a full view of the drama, a play within a play, where the Sutpens' and the narrators' (including Quentin's) dramas are enacted at the same time. I have so far examined Chapters I and II. The task in this paper, then, is to examine Chapter III. I will consider first the psychological distance between Quentin and the readers, second, the narrative structural distance between Quentin and the readers, and finally, the information about the Sutpens' secret, concentrating on the shifts of voice and perspective in the novel.

私はこれまで、*Absalom, Absalom!*という作品が読者に与える読書体験の特異性に注目してきた。そして、この特異性が①読者を Quentin と同一化させる一方で、②Quentin と読者の持つ情報に差を作り、さらに③Quentin をも相対化する視点から作品を鑑賞させるような(以下①②③と略す)、一見矛盾する作用を生じる複合的な仕組みを成り立たせている語りの技法によって生まれているのではないかと考える立場から、この技法を明らかにしようと、物語言説を、voice, perspective という2つの観点から分析し、その解明を試みてきた。本稿では、既に取り上げた第1章、第2章に続き、第3章について検討してみたい。

最初に第3章の物語状況を確認しておきたい。第2章は Quentin が Rosa と再び会う約束をして自宅に帰った後、父 Mr. Compson からの話を聞かされているところで終わっていた。第3章は、次のような物語言説で始まっている。

If he [Sutpen] threw her [Rosa] over, I wouldn't think she would want to tell anybody about it *Quentin said*.

Ah *Mr Compson said again* After Mr Coldfield died in '64, Miss Rosa moved out to Sutpen's Hundred to live with Judith.<sup>1</sup>

“*Quentin said*”, “*Mr Compson said again*”という物語言説は、External narrator<sup>2</sup>の voice によるものである。ここで External narrator は第1次物語世界の枠をつくり、その枠内に Quentin と

Mr. Compson の 2 人の character を設定する働きをしている。物語内容は、2 人の話の内容と、Rosa を she という代名詞でうけて話を始めていることから、第 2 章の続きであると考えられる。2 人の対話が行われている、時、場所は第 2 章の終盤部分と同じで、1909 年 9 月、Mr. Compson の家である。物語の中心になるのはおよそ 1859 年から 1866 年の間の、Henry が Bon と大学で知り合った頃から、Henry が Bon を殺す頃までに起こった Sutpen 家の出来事で、多少その前後の出来事にも触れながら、Rosa を中心として描かれている。

## 1. 1

初めに、①と③の仕組みに関して、Quentin と読者との距離<sup>3</sup>の操作を検討したい。まず、Quentin と読者との心理的距離の操作を取り上げる。第 1 章の物語言説においては、a. External narrator が Quentin の perspective から語る物語言説や、b. イタリックスの書体で Quentin の内的意識が描写される物語言説、といった Quentin の内面描写が目立っており、それが読者に Quentin と視点を共有させる働きをしていた。これに対し、第 3 章では External narrator が Quentin の perspective から語る物語言説も、イタリックスによる Quentin の意識の描写も全くない。

Quentin の perspective から語られる物語言説は、彼自身の voice で語られている箇所が 2 箇所、そして彼以外の character narrator の voice で語られる箇所が 3 箇所の、計 5 箇所のみである。そのうち、“If he [Sutpen] threw her [Rosa] over, I wouldn't think she would want to tell anybody about it.” (p.46, ll. 1-2)、の部分は、自分ではなくて Rosa の心情についてのコメントである。もう一つは、“No, sir” (p.48, l. 13)、の部分だが、これは単に父親に返事をしているだけである。いずれも、彼の内面描写ではなく、読者が感情移入する余地はない。

彼以外の voice で、彼の perspective から語られている物語言説は、いずれも Mr. Compson の voice によるもので、その性質から 2 つに分類できる。ひとつは、Mr. Compson による、Quentin の話した、あるいは話すと思われる言葉の引用で、“pieces of coal pressed into soft dough and prim hair of that peculiar mouselike shade of hair on which the sun does not often shine” (p.51, ll. 21-23) の部分と、“(you [Quentin] might say, reperculated)” (p.60, ll. 16-17) の部分である。これらの言葉は、Rosa についての Quentin による描写であり、そこには、Quentin の「見方」が表れていると考えられる。しかし、Mr. Compson が narrator の場合、彼の発言全体から考えると、その言葉は、本来の発話時の文脈をはずれていることが想定できる。従ってこの部分は、Quentin よりも彼の表現を借りて語る Mr. Compson の考え方を表現することに重点があり、narrator である Mr. Compson の介入の度合いが高い物語言説であると言える<sup>4</sup>。

もう一つは、“and you [Quentin] can imagine too what Miss Rosa's notion of such garments would be, let alone what her notion of them would look like when she had finished them unassisted.” (p.61, ll. 6-8) の部分である。ここは、imagine という動詞が使われていることから、Quentin の思考の内容を Mr. Compson が語っていると考えられる。しかし“can”という助動詞が示すように実際に Quentin が想像しているのではない。Quentin の perspective を利用して Mr. Compson が Rosa の「衣服」についての考え方を推察しているのである。Quentin が Rosa の考え方を想像しているのではなく Mr. Compson が想像していると言える。これらの計 5 箇所の物語言説の分析から、第 1 章において頻出したような Quentin の内面描写は、第 3 章においては全くないことがわかる。

## 1. 2

次に Quentin と読者との物語構造上の距離について、第3章における External narrator の働きを考えてみたい。③の仕組みと関係あると思われる External narrator の機能についての前稿までの考察では、第1章、第2章においては、External narrator が、Quentin を物語世界内に character として設定することで、Quentin は *Absalom, Absalom!* という小説世界の中に character として取り込まれ、この小説を外から鑑賞する読者の立場と隔てられ、従って、物語構造上の距離は大きくなっていった。第3章の分析では、この章の物語言説の表現上の2つの特徴に注目してみたい。

その特徴の一つは、External narrator の語りによる物語言説の量が非常に少なく、文構造が単純なワンパターンであることだ。この章では、External narrator の語りによる物語言説は、既に引用した“*Quentin said*” (p.46, l. 2), “*Mr Compson said again*” (p.46, l. 3) という2箇所と“*Quentin said*” (p.48, l. 13) という1箇所の計3箇所のみである。これらを比べると明白なように、S + V (+adv.) の単純でワンパターンな文法構造で、Vは、伝達動詞の say の過去形しか使われていない。これらの External narrator による物語言説においては、Quentin と Mr. Compson という2人の character が話をしているという状況が設定されているだけである。この章では、この状況設定、第1次物語世界の枠づくりが External narrator の働きだと言える。

特徴の2つめは、External narrator の voice が、全てイタリックスの書体で示されているということである。この小説では、第1章でもイタリックスの書体で書かれた物語言説があり、そこでは、その物語言説が、Quentin の内的意識の描写であるということを示していた。しかし、第3章のこの部分については、この小説の External narrator が非人格の narrator であるため、第1章で Quentin について頻繁に用いられたような、内的意識を示すものとは考えられない。では、ここでの External narrator の voice のイタリックスは何を示しているのだろうか。仮にこの部分がイタリックスを使わずに書かれるとすると、どのように変わってくるかを、この章の冒頭を例にとって考えてみると、おそらくこの部分は、“If he threw her over...” *Quentin said.* “Ah,” *Mr Compson said again.* “After Mr Coldfield died in '64,…” というように、character の台詞が引用符でくられるはずである。第2章で、Mr. Compson の台詞が長いものが多かったにもかかわらず、引用符で囲まれていたことを考えれば、この推測は妥当であると考えられる。これらを比較すると、第3章では、引用符で character と External narrator の voice が区別される代わりに、External narrator の voice のみのイタリックスによって、両者の違いが示されているのだと言えよう。それではなぜ引用符ではなくてイタリックスなのだろうか。External narrator の voice の部分がこの章全体に占める割合は非常に少なく、しかもその働きも非常に限定されたものであることに注目しよう。第3章では character narrator の voice による物語言説が大部分で、時には、Mr. Compson が Rosa の台詞を直接話法で伝えることにより Sutpen 物語に対して、external narrator としての機能も果たしている。このことから、この章でのイタリックスは、External narrator が narrator としては背景に退いて、地の文を character narrator に任せる為に用いられていると思われる。この語りの状況を、これまでの2つの章で出てきたパターンと併せて図示すると次のようになる。



の差の比較はできないが、読者が、どのように、そしてどの程度情報を与えられていくかを見ていくことで、本章以降の、②の仕組みを考える一助としたい<sup>7</sup>。

先立つ第1章、第2章で読者は、External narrator, Rosa, Mr. Compson の3人の narrator から情報を得ていた。これらの narrator のうち、Mr. Compson は、自らが Sutpen 家の物語を話すだけでなく、Rosa の語る物語がやや信憑性に欠けることを示し、Rosa がそれまでに読者に与えてきた情報を修正するという形での情報提供をも行っていた。第3章においても、Mr. Compson は、こうした方法で読者に情報を提供していると思われるので、2つの方法に沿って彼の voice による物語言説を分析してみよう。

まず、Mr. Compson がどのように Rosa の情報を修正していくか見ていく。第1章から第3章までを通じて、Rosa は、Sutpen を悪魔のイメージで捉えているが、こうしたイメージが形成された過程が、Mr. Compson の物語言説によって明らかになる。第3章冒頭で、Mr. Compson は Rosa の生い立ちについて語っている。

She (Miss Rosa) was born in 1845,... at the price of her mother's life and never to be permitted to forget it, and raised by the same spinster aunt..., growing up in that closed masonry of females to see in the fact of her own breathing..., not only a living and walking reproach to her father, but a breathing indictment ubiquitous and even transferable of the entire male principle.... (pp.46-47, ll. 8-2)

Mr. Compson によると、彼女は1845年に、母親の命を代償にして生まれたため、父親を憎むようになった。さらに、オールドミス叔母に育てられた彼女は、自分を父ばかりではなく、男性原理全体への生きた、偏在する、転写さえ可能な告発状であると考えようようになった。Rosa は父を男性一般という集合の中の不特定の1人の要素と見なし、父個人に向けられていたはずの憎しみを男性一般という集合の各要素の持つ属性と見なすようになったのである。彼女が、父個人と男性一般との間の関係をこのように捉えているということは、唯一のと言ってもよい Rosa の周囲にいる結婚可能な年齢の男性である Sutpen に憎しみを転化するようになる素地ができあがっていたことを意味している。

このような出生の背景を持っているので、Sutpen を悪魔と見るような見方は、容易に彼女に受け入れられるものであることは間違いないが、この Sutpen 像自体は、実は、叔母の教育の結果である。彼女を育てた叔母について、Mr. Compson は、“who [Rosa's aunt] had taught Miss Rosa to look upon her sister as a woman who had vanished not only out of the family and the house but out of life too, into an edifice like Bluebeard's and there transmogrified into a mask looking back with passive and hopeless grief upon the irrevocable world, held there not in durance but in kind of jeering suspension by a man [Sutpen]....” (p.47, ll. 12-17), と述べている。Mr. Compson の見解によれば、母親代わりの叔母によって、Rosa は、Sutpen を“Bluebeard”と見、彼と結婚した姉を Sutpen によって別世界にとらわれてしまった希望のない悲嘆に暮れた女性と見るように仕込まれたのである。こうして、Rosa にとって Sutpen は、自分の母親を死に追いやった父と同類で、憎むべき「男性」の一人であり、姉を連れ去り、不幸にし、Coldfield 家を衰退させる原因となった、諸悪の根元として写るようになる。

このように、彼女は Sutpen を非常に強く忌み嫌うようになったのだが、一方でそうした憎悪の感情を彼に抱くようになった背景には彼女自身の経験は全く関わっていないという事実が語られることは、注目されなければならない。なぜなら、このことは、Rosa が Sutpen を悪魔としてみるよ

うな見方が彼女の偏見であることを、示すことになるからだ。Mr. Compson は、Sutpen が南北戦争から帰ってきた時、Rosa が受けた印象を次のように述べている。

When he returned home in '66, she had not seen him a hundred times in her whole life. And what she saw then was just that ogre—face of her childhood seen once and then repeated at intervals and on occasions which she could neither count nor recall, like the mask in Greek tragedy interchangeable not only from scene to scene but from actor to actor and behind which the events and occasions took place without chronology or sequence and leaving her actually incapable of saying how many separate times she had seen him for the reason that, waking or sleeping, the aunt had taught her to see nothing else. (pp.48—49, ll. 34—7)

Rosa が66年に Sutpen と会った時、彼女は悪魔の顔を見たのだと Mr. Compson は語っている。このような Rosa の、Sutpen を悪魔と見る見方は、Rosa が子供の時に定着してしまっている。ところが、実際には Rosa は彼とは唯一度会ったことがあるだけである。叔母が取り計らったせいで Rosa は子供の時に Sutpen 屋敷を訪問した時にさえ Sutpen と顔を合わせることはなかった<sup>8</sup>。又、Ellen が里帰りをする折にも Sutpen は一緒にやっては来なかった<sup>9</sup>。だから彼の行動なり性格なりを Rosa が悪魔に結びつけているわけではない。又、彼の顔は、“the mask in Greek tragedy interchangeable”にも例えられていることから、ここで Rosa は、Thomas Sutpen という固有名を持った特定の人間の顔を悪魔に例えていると言うよりも、彼に“ogre”という役割を振り当てているだけだということがわかる。彼女にとっては、Sutpen の「悪魔性」が問題なのではなくて、自分達の生活を狂わせたと彼女が信じている「悪魔」という概念とその働きが存在するということを証明するために、それを体現する役者が必要なのであって、それを演じる役者は誰でもよいのである。Rosa の語る Sutpen 像は Rosa が自分の不幸を説明するために彼女によって作り出されたもので、Sutpen の個性を反映したものではない<sup>10</sup>。これらのことから、Rosa の Sutpen に対する見方は、偏見に満ちており、それ故に彼女の Sutpen に関する物語は、彼女の Sutpen 像が色濃く反映されているためにあまり信用できないと言える。

## 2. 2

Rosa の Sutpen に対する見方はかなり偏ったものであり、彼女の Sutpen に対する物語は信憑性が低いことをこれまで見てきたが、Bon に対しても彼女の語る物語には信用がおけない。Mr. Compson は言う。

So Miss Rosa did not see any of them [Sutpens], who had never seen (and was never to see alive) Charles Bon at all;... Miss Rosa never saw him; this was a picture, an image. (p.58. ll. 17—32)

彼女は Bon と会ったことは一度もなく、彼女の語る Bon は、彼女が想像した“a picture, an image”である。しかもこの image は、Mr. Compson が“Miss Rosa, not listening, who had got the picture from the first word, perhaps from the name, Charles Bon,...” (p.59, ll. 22—24) というように、Charles Bon という“word”, “name”から得られたものなのである。

このように、Rosa が描いている Bon の姿は全く根拠のないもので、彼女の想像力だけから成り立っていることがわかる。彼女は自分の青春時代に恋愛には全く縁がなかったので、Judith に自分を重ね合わせることによって、Bon と疑似恋愛をし、自分の抑圧された願望を具現化されるようにしたのである。従って、彼女が描く Judith と Bon は、彼女が望むような恋愛をしているし、Bon は、彼女が望むような恋人として描かれることになり、現実の Bon 個人の個性が忠実に描かれているというわけではないのである。

## 2. 3

Henry が相続権を放棄し、家出をして Bon と行動を共にするに至った経緯についての Rosa の持つ情報は、どのくらいの量で、どの程度信頼できるのだろうか。これについて Mr. Compson は次のように語っている。

Henry just vanished: she heard just what the town heard—that on this next Christmas Henry and Bon came home again to spend the holidays, the handsome and wealthy New Orleansian whose engagement to the daughter the mother had been filling the town's ears with for six months now. They came again and now the town listened for the announcement of the actual day. And then something happened. Nobody knew what: whether something between Henry and Bon on one hand and Judith on the other, or between the three young people on one hand and the parents on the other. But anyway, when Christmas day came, Henry and Bon were gone... and nobody could have told from either Sutpen's or Judith's faces or actions or behavior, and so the tale came through the negroes: of how on the night before Christmas there had been a quarrel between, not Bon and Henry or Bon and Sutpen, but between the son and the father and that Henry had formally abjured his father and renounced his birthright and the roof under which he had been born and that he and Bon had ridden away in the night and that the mother was prostrate—though, the town believed, not at the upset of the marriage but at the shock of reality entering her life: this the merciful blow of the axe before the beast's throat is cut. Though Ellen of course did not know this either.

That's what Miss Rosa heard. (p.62, ll. 1-25)

この部分から、クリスマスの前夜、Henry と Thomas Sutpen との間に起こった争いについて、Rosa は町の人々から伝え聞いたことしか知らないと言うことがわかる。しかも町の人々も、確実な情報を持っているわけではない。唯一の情報源は“negroes”であるが、彼らも、直接事件にかかわっているのではなく噂の種を持っているにすぎない。そしてそのように町の人々の間に広まっている噂の内容も、“something happened”と言うだけで明確でない。Rosa はこの件に関しては、何も語るべきものをもっていないのだ。

Bon に従って家を捨てた Henry は、やがて Bon とともに南軍の一員として戦場に赴くことになる。それから4年間彼らは Jefferson に姿を現さないが、その4年の間 Rosa は彼らの様子を全く知らない。Mr. Compson は、“Miss Rosa did not know it at all. The first intimation she had had in four years that her nephew was still alive was the afternoon...” (p.69, ll. 9-11), と語

っている。Rosa は、Henry と Bon が、どこで何をしていたか知らないばかりでなく、Henry が生きていたことをさえ知らなかったのである。

このように、第3章では、Mr. Compson はまず、Rosa が、Sutpen に対して偏見を持っていることを明らかにし、又、実際には、彼女が事件については、直接見聞きしたことがないということを示すことで、Rosa の narrator としての信憑性に疑義を示し、彼女が読者に与えてきた情報が、必ずしも正しくないことを示唆する働きをしている。

## 2. 4

最後に Mr. Compson がどのように読者に情報を提供していくかを見ていこう。Mr. Compson は直接事件に関することを見たり聞いたりして、Sutpen 家の人々に関わってきた character ではない。そのため、彼の情報源は、父 (General Compson) や、母、町の人々の話、その他状況証拠などであり、彼の話は推測に満ちている。

Perhaps she [Rosa] saw in her father's death, in the resulting necessity upon her as not only an orphan but a pauper,... perhaps she saw in this fate itself supplying her with the opportunity.... Perhaps she even saw herself as an instrument of retribution.... (pp.47-48, ll. 34-6)

この部分だけを見ても“perhaps”という推測を示す副詞が3回も用いられているし、この章全体で見ると、この副詞に限っただけでも、18回も使われている。このように Mr. Compson が語る物語は全てが事実に基づいているわけではない。それにもかかわらず、彼は narrator としては Rosa よりも信頼度が高いように見える<sup>11</sup>。なぜなら、Rosa は Sutpen の物語に対しては等質物語世界的 narrator であり物語を偏って伝えてしまう傾向が非常に強いが、Mr. Compson は、Sutpen の物語に対しては異質物語世界的 narrator であり、その物語を客観的に見ることのできる立場にあるように見えるからだ<sup>12</sup>。また、Mr. Compson は Sutpen の物語に対しては物語世界外の narrator でもあり、External narrator とは明らかに違いがあるにもかかわらず、External narrator の擬似的機能を果たすことがある。彼は、自分の perspective からだけでなく、他の character の perspective をも借りて物語を語り、読者に情報を与えていくのだ。

Sutpen が自分の子供達に自分で名前を付けたことを述べる部分において、Mr. Compson は、

He named Clytie as he named them all, the one before Clytie and Henry and Judith even, with that same robust and sardonic temerity, naming with his own mouth his own ironic fecundity of dragon's teeth which with the two exceptions were girls. (p.48, ll. 26-29)

と語る。この部分では、*Absalom, Absalom!* に登場する Sutpen の4人の子供達、Bon, Clytie, Henry, Judith のうち、3人の子供達の名前をはっきり挙げる一方で Bon の名前だけは挙げていない。このことから、Mr. Compson は、この時点で Bon と Sutpen が父子の関係にあるということ、推測しているにしても、少なくとも確信を持つには至っていないということがわかる。そして、読者に対してはこの言説は、Bon が Sutpen の子供であるということ（もしそれが事実であるとするならば、）この時点では隠す働きをしている。<sup>13</sup>

第3章では、このように、Bon と Sutpen との関係については言及されることはない。Bon は単なる Henry の友人として描かれている。

That was the summer following Henry's first year at the University, after he had brought Charles Bon home with him for Christmas and then again to spend a week or so of the summer vacation before Bon rode on to the River to take the steamboat home to New Orleans; the summer in which Sutpen himself went away, on business, Ellen said, told, doubtless unaware, such was her existence then, that she did not know where her husband had gone and not even conscious that she was not curious, and no one but your grandfather and perhaps Clytie ever to know that Sutpen had gone to New Orleans too. (p.55, ll. 28-26)

この場面の描写において Bon は、Henry の友人として Sutpen 屋敷に連れられてくる。そして、彼は New Orleans へ帰っていく。彼はあくまでも New Orleans 出身の青年として描かれているのである。一方で、Sutpen もこの時 Bon の出身地の New Orleans へ行っているという点は読者の関心を引くだろう。しかも Ellen が夫は商用で留守なのだと言っているのに、彼女は夫がどこへ行っているのか興味もないし、知らないのだ、という但し書きがわざわざあることから、New Orleans という場所に、Sutpen 家の謎を解く鍵があるのだと読者に予想させる。

Sutpen, Henry, Bon の3人の間柄を示唆するのに、彼らの風貌について言及される箇所がいくつかある。Mr. Compson は、自分の母親の言葉を借りて Sutpen と Henry の容姿について次のように言う。

your grandmother said he was as tall as his father now and that he sat the mare with the same swagger although lighter in the bone than Sutpen, as if his bones were capable of bearing the swagger but were still too light and quick to support the pomposity. (p.56, ll. 22-25)

Quentin の祖母によれば、Sutpen と Henry とは、容姿の雰囲気はかなり似ているので、Henry は Sutpen のミニチュアといった印象を与える。

それに対して、Bon の容姿、態度については、次のように Mr. Compson は語る。

a young man of a worldly elegance and assurance beyond his years, handsome, apparently wealthy... —a man with an ease of manner and a swaggering gallant air in comparison with which Sutpen's pompous arrogance was clumsy bluff and Henry actually a hobble-de-hoy. (p.58, ll. 23-32)

都会育ちで優雅な彼は、田舎育ちの Henry とは正反対の雰囲気を持ち主として描かれている。Sutpen 自身との比較においても、育ちの良い、上品な青年として描かれている<sup>14</sup>。

さらに、Bon と Sutpen 家の人々との関係を Mr. Compson がどのように捉えているかが表れている箇所として、“when the destiny of Sutpen's family which for twenty years now had been... and in which the four members of it floated in sunny suspension,... and the four peaceful swimmers turning suddenly to face one another,...” (p.58, ll. 7-13) という Mr. Compson の言

葉が挙げられる。Sutpen 家の成員についての言及がなされているこの箇所では、4人という人数が挙げられているが、Sutpen の法律上の家族は、Sutpen, Ellen, Henry, Judith の計4人になるから、このメンバーには Bon は含まれていないことになる。

Sutpen 家の4人のメンバーに Bon を加えた5人について書かれた部分もある。

She [Ellen] postulated the elapsed years during which no honeymoon nor any chance had taken place, out of which the (now) five faces looked with a sort of lifeless and perennial bloom like painted portraits hung in a vacuum,... (p.59, ll. 15-18)

now という言葉から、既に引用した、先行する箇所に書かれた、4人の Sutpen 家のメンバーに物語の主要人物がもう1人加わったことがわかるが、この最後の一人を Bon と考えると、Bon が舞台上に登場するのは、Henry が大学で彼と出会ってから以降なので辻褄が合う。

これまで見てきたように、第3章は、殆どが Mr. Compson が narrator であり、Mr. Compson の知っている情報しか読者には提供できない。そして、実際に Sutpen 家の人々の間に何が起こったのかについて、“Nobody knew what: (p. 62, l. 7)”と Mr. Compson が共同体の perspective から、誰にもわからないと語るように、Mr. Compson の情報量にも限界がある。しかし、第1章、第2章に比べると、1. Rosa の情報の疑わしさを示し、2. Clytie が Sutpen の娘である事を明らかにすることで、Clytie, Henry, Judith 以外にも子供がいる可能性を示唆し<sup>15</sup>、3. Bon の出身地であると Mr. Compson が考えている New Orleans に何か Sutpen 家の秘密を解く鍵がありそうだということを示す、というように、その正誤はさておき、読者の情報量は増している。本稿では、第3章において読者が Sutpen 家の謎についてどのように情報を与えられていくのかを検討した。今後も、読者に提供される Sutpen 家の情報の伝達の方法と量とを引き続き検討すると同時に、どのようにして Quentin との情報量の差が生まれるのかを考察していきたい。

(言語文化学科、英語文化専攻)

key words; 1. William Faulkner. 2. *Absalom, Absalom!* 3. Narrative Technique.  
4. Voice. 5. Perspective.

註)

1. William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: Vintage Books, 1990), p.46, ll. 1-3. 以下、*Absalom, Absalom!*からの引用は全てこのテキストにより、頁数及び行数は引用に続けて括弧内に示す。なお、適宜次のテキストを参照した。Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: The Modern Library, 1951.) 又、テキストの異同に関しては Longford の研究書を参照した。
2. 私は *Absalom, Absalom!* の第1章、第2章を取り扱った“*Absalom, Absalom!*における Faulkner 語りの技法 I”及び“II”において、第1次物語世界に登場しない narrator に対して external narrator という用語を用いた。しかしながら、第3章の Mr. Compson のように第1次物語世界に character として登場し、かつ第2次物語世界に対しては external であるような narrator を、character (第1次物語世界に対して) external (第2次物語世界に対して) narrator と記述する以上 (以下 character external narrator), external narrator という用語は、厳密に narrator と物語世界との関係を示す機能上の用語として用いられるべきであるとの考えから、本稿以降の論考において第1次物語世界に character として登場しない narrator に特別に大文字の External narrator という呼称を与えたいと思う。
3. 距離という概念について、前稿までの私の考え方と、本稿での考え方の間には違いがある。前稿までは全体と

して漠然と心理的距離という言葉を用いてきたが、本稿では、全体を示す言葉としては、単に距離という言葉を使っている。さらに下位区分として、心理的距離と物語構造上の距離という2つを設けた。前者は、読者が character に感情移入する事などで変化する character との心情面での距離のことであり、後者は、物語世界内に疑似聞き手として読者を設定するなどの、物語世界と読者との関係の操作によって変化する、character との物語構造上の位置関係の度数のことである。

4. これらの物語言説は Quentin の perspective から語られているものとして分類すること自体に異論があるかもしれない。確かにここは、部分的な引用であるから、純粋に彼の perspective から語られているとはいいがたい。正確に言えば、Mr. Compson が Quentin の表現を拝借して、自分の見方を表している物語言説である。しかしながら私は、この部分は、Quentin からの引用であるというまさにその理由の故に、External narrator が Quentin の perspective から語る場合に比べて narrator の介入の度合いにかなりの差はあるものの、部分的には Quentin の「見方」が表れていると考えて Quentin の perspective によるものとして分類した。そもそも、character narrator が純粋な意味で他の character の perspective から語ることは、不可能である。多かれ少なかれ、その場合には、narrator は、焦点人物の思考、言説に、自分の思考を反映しているのである。この場では、この narrator の介入の度合いをあえて無視したが、この問題は、私にとって非常に興味深いものであるので、以後の論考においても平行して考えてみたい。
5. John T. Irwin は、*Absalom, Absalom!* の narrator 達について、“There are... four narrators in the novel—Quentin, his father, his roommate Shreve, and Miss Rosa Coldfield—but of these four certainly Quentin is the central narrator, nor just because he ends up knowing more of the story than do the other three, but because the other three, only function as narrators in relation to Quentin... One reason that the voices of the different narrators sound so much alike is that we hear those voices filtered through the mind of a single listener: Quentin’s consciousness is the fixed point of view from which the reader *overhears* the various narrators, Quentin included.”とっており、おおざっぱな言い方ではあるが、Quentin の果たす物語構造上の機能に着目していると思われる。(Irwin, p.26)
6. Richard Gray は、“Like the narrators, we are compelled to compare versions, fill in gaps and discover inconsistencies.... *Absalom, Absalom!* is ‘about’ the making of history and enforced just such a making not only on its character but also on its audience....”と述べる一方で、“He [Quentin] is... torn between different versions of the past, the parameters of which are marked by the opposing narratives of Rosa Coldfield and Mr Compson.”と述べており、物語構造上読者の立場に最も近い存在として Quentin をとらえているようである。(Gray, p.208, p.218)
7. *Absalom, Absalom!* の中で、Quentin が Bon に黒人の血が流れているという秘密を探り当てていくその技法について、Philip M. Weinstein は、“The point of so much of this invention is to postpone authoritative comprehension (to keep it flexible, revisable) in view of newly found data, newly proposed lenses upon the data. We are indeed all but finished with our reading when we learn that Bon is not just brother but black brother: Faulkner has heroically suspended, kept occluded, that discovery.”と述べ、私が②の技法として本稿で扱っている、読者への Sutpen 家の秘密に関する情報の与え方についての、*Absalom, Absalom!* における技法に注目している。(Weinstein, p.54) 又、Hershel Parker は、Quentin は、人から話を聞くことによってだけでなく、自分の目で見た情報によって Sutpen 家の秘密を探り当てたとして持論を展開している。確かに、*Absalom, Absalom!* の物語言説の中で、明示されていない部分において、Quentin が何らかの方法で Sutpen 家の秘密に関する情報を手に入れているということは、読者とは違う方法で情報を手に入れているということであり、興味深い。(Parker, pp.275–278) 又、Frederick R. Karl は、*Absalom, Absalom!* における情報の操作について、“Although about one-third through *Absalom* we possess all the facts we need to understand the dramatic situation, the problem is we do not know we have all the facts... Information ma-

nipulates the reader until he is uncertain about what he controls, and experiences in this respect an inverted detective story, not too many details, but an insufficiency.”と、鋭い指摘をしている。(Karl, p.557)

8. このことについては、テキスト中に、“she [Rosa] would not see him [Sutpen] even at the dinner table because the aunt would have arranged the visit to coincide with his absence.” (p.49, ll. 11–13) という箇所がある。
9. その理由を推察する Mr. Compson の語りの部分に次のような件がある。“Or perhaps the reason was the one which Miss Rosa told you [Quentin] and which the aunt gave her... Or perhaps it was the reason which Sutpen gave himself and which the aunt refused to believe because of that very fact...” (pp.49–50, ll. 33–6) この物語言説によれば、Sutpen が妻の実家を訪れない理由としていくつか挙げられているもののうち、Sutpen 自身が述懐しているものを、Rosa の叔母が否定し、その叔母が教えたものの方を Rosa は信じている。叔母が否定した Sutpen による理由は、それが Sutpen 自身が話したというその事実故に拒否されたとあるから、この Mr. Compson の発言を信頼するとすれば、叔母は理由を捏造し、その叔母が作り上げた理由の方を Rosa は信じていることになる。又、Rosa が10歳になったとき、既に叔母は家出をしておしまっていたが、このころになると Mr. Coldfield は、Rosa を連れて Sutpen 屋敷に一年に一度の割合で行くようになっていた。こうした Coldfield 氏の態度の変化の原因を推察する場面で、Mr. Compson は次のように語っている。“perhaps from a sense of duty, which was the reason he [Mr. Coldfield] gave and which in this case even the aunt would have believed, perhaps because it was not the true one, since doubtless even Miss Rosa would not have believed the true one...” (p.50, ll. 20–23) この部分になると、叔母ばかりでなく、Rosa も本当の理由を、それが真実であるとしても自分の解釈とそぐわないときには受け入れない性質であるということがわかる。
10. Rosa が Sutpen との結婚に同意したことについて Mr. Compson は次のように語っている。

Now the period began which ended in the catastrophe which caused a reversal so complete in Miss Rosa as to permit her to agree to marry the man whom she had grown up to look upon as an ogre. It was not a volte face of character: that did not change. Even her behavior did not change to any extent...she had spent...writing heroic poetry about the very men...—and incidentally of whom the ogre of her childhood made one and (he brought home with him a citation for valor in Lee’s own hand) a good one— (p.53, ll. 7–27).

ここには、Rosa の Sutpen に対する見方の変化が示されている。Rosa が Sutpen を受け入れるようになったのは、悪魔であった Sutpen が善人に改心したからというわけではないのである。彼女にとっては Sutpen という固有名を持った一人の人間としての彼の個性はどうでもよい。これまで Sutpen のことを悪魔として考えていたのは、彼女の叔母の Sutpen に対する考え方をそっくり受け継いだからだが、その考え方は、Coldfield 家＝高貴な血筋 vs Sutpen＝野蛮な悪魔という価値観に基づいて、Sutpen に悪魔の役割を割り当てたものだった。一方、彼女が Sutpen との結婚を承諾した頃には、彼は祖国南部のために戦った英雄として彼女の目に映っているが、その見方も Sutpen という人間の個性には関わりなく広く南部一般に浸透していた北部＝略奪者 vs 南部＝正義という価値観に基づいて Sutpen に南部の正義を行使する英雄の役割を当てはめたにすぎない。結局、Rosa の幼い頃からの Sutpen に対する考え方は、Sutpen を一人の個性を持った人間としてとらえた彼女自身の判断ではなかったわけだ。

11. むろん Mr. Compson は narrator として全幅の信頼が置けるわけではない。それは、彼の推論が誤りを含んでいることが後続の章で示されることから明らかになる。
12. narrator と、それが生み出す言説によってできる物語言説との関係を規定する際、私は、これまでの論考において物語世界的という意味で、external という形容詞のみを用いてきたが、それだけでは不十分であると思われる。というのは、この観点からのみ見ると語り手自身が物語世界に登場人物として登場するかどうかという点での区別ができないからだ。例えば、Mr. Compson と Rosa という2人の narrator の比較においては、2

人とも external narrator と規定することしかできず、両者の違いを明確に表すことができない。そこで、ジュネットにならって、本稿において以降は、「等質物語世界的」、「異質物語世界的」という概念を使いたいと思う。詳しくは、ジュネット、「物語の詩学」「人称」の章を参照。

13. “which with the two exceptions were girls”の部分は、Clytie, Henry, Judith が生まれる前に、Sutpen には息子があったということを示唆している。この小説では、第4章で初めて Sutpen が問題にしていたのは Bon の重婚という問題であるという指摘がはっきりとなされるが、この部分は注意深い読者に対しては、重婚よりも近親相姦の問題の方を先に明らかにする可能性もあるので、Sutpen 家の謎が徐々に明らかになっていくというこの小説の効果を損なうものではないかという疑問が浮かんでくる。実は、この部分は modern library 版では削除されていて、Noel Polk の改訂によって著者の意図に照らし合わせて新たにつけ加えられた部分である。Polk 氏に、この部分についての意見をうかがったところ、“Perhaps what it RATHER tells us that Mr. Compson, who is narrating there, at least THINKS that to be the case.”というお返事をいただいた。確かに、Mr. Compson が、Sutpen と Bon との関係を第3章で推察しながらも、この場では Bon の名前に言及しないのも、第4章で、近親相姦よりも重婚の方にこだわっているのも、この2人の関係に関して確信を持っていないからだと考えれば辻褃は合う。又、小説の効果という点から見ても、氏の最近の著書 *Children of the Dark House* 及び論文、“The Artist as Cuckold”によれば、Sutpen 家の謎の核心は、重婚でも、近親相姦でも、異人種結婚でもないということになるので、あまり問題ではない。一方で、核心が、異人種結婚にあると考えるものにとっては、多少疑問の残る passage ではある。しかしながら、いずれにしても、この時点では、Bon の名前に言及がない限り、この本を初めて読む読者が、2人の関係に気づく可能性はほとんどない。それよりも、むしろ私の興味を引くのは、Mr. Compson が、自分の推測の全てを読者に披露するわけではない、という事実である。このことは、Quentin について論じるときに、もっと大きな意味を持つてくると思われるので、その際に再度取り上げたい。この場では、Mr. Compson が、どの程度の情報を得ているかと言うよりも、読者がどのように情報を与えられていくかを考えることを主眼としているので、この議論はここでとどめておくが、私のこのような質問に快く答えてくださった Polk 氏に感謝したい。

又、Cleanth Brooks は、modern library 版を用いているにもかかわらず、“Sutpen named all his children including Charls Bon”という推測が、第3章のこの部分において成り立つとしている。ただし、Brooks は、この場面では、この推測は General Compson によるものだとしており、この推測が Mr. Compson のものとして示されるのは、第7章であるとしていることから、Brooks が、第3章のこの部分だけを根拠にしているのではなく、第7章での Quentin と Shreve とのやりとりに基づいて、Bon が Sutpen の息子であるという推測を読みとっていることがわかる。Brooks のこの読みは、注意深い読者の典型的な解釈の1例として、私の予測を裏付けるものであり、興味深い。(Brooks, pp.423-36)

Sutpen 家の秘密 (Bon が黒人の血を持つ、Sutpen の息子であるということ) が Quentin と Shreve によって暴かれるのだとする考え方は、従来の批評においては一般的であった。例えば、70年代には、Judith Bryant Wittenberg が、“Quentin-Shreve are actual ‘novelists’ at work, receiving information, weighing alternatives, and attempting to create a finished artifact which contains real meaning.” (Wittenberg, p.132) と述べているが、ここで彼女は、Sutpen 物語に、Quentin と Shreve がたどり着く real meaning があるものと前提している。このような前提を、例えば、Polk のような批評家が覆して見せたわけだが、一方で、Bon が黒人の血を持つ、Sutpen の息子であるということを前提した上で、非常に有意義な批評をしている批評家も相変わらず多い。例えば、Barbara Ladd は、Rosa, Mr. Compson, Quentin, Shreve の4人の語り手達の Bon に対する解釈の限界を、個人の伝記的背景ではなく、それぞれの character の生きた文化的背景一特に、南部における「植民地」の捉え方を中心にした一を拠り所にして解明している。

なお、「Bon の黒人の血のことを Quentin はどのように知り得たか」という問題に対して、田中久男氏は、著書『ウィリアム・フォークナーの世界』の中で、Polk の、Bon は Sutpen の息子ではないとする大胆かつ興味

- 深い論考をも視野に入れた上で一考察を示しているので、参照されたい。(田中, pp.244-246)
14. 62頁では, “the handsome and wealthy New Orleansian whose engagement to the daughter the mother had been filling the town’s ears with for six months now.” (p.62, ll. 1-6) という描写が Bon についてなされている。ハンサム, 金持ち, New Orleans 人といった3つの形容詞は Sutpen や, Henry について用いられることはなく, Sutpen 家の人間との相違点を際立たせる働きをしている。
15. Clytie が Sutpen の娘であるという事実は, Sutpen には他に子供がいるというこを示唆するばかりではなく, Sutpen 家の秘密を明かす重要な鍵ともなり得るということを, Loren F. Schmidtberger は, その論文の中で, 示している。

## 参考文献

- Brooks, Cleanth. “What We Know about Thomas Sutpen and His Children” *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven: Yale University Press, 1963): 423-36.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* (New York: Vintage Books, 1990).
- Absalom, Absalom!* (New York: The Modern Library, 1951).
- Genette, Gerard. “Discours du recit, essai de method” *Figures III* (花輪光・和泉諒一訳『物語のディスクール: 方法論の試み』書肆風の薔薇, 1985).
- . *Nouveau discours du recit* (和泉諒一・神郡悦子訳『物語の詩学: 続・物語のディスクール』書肆風の薔薇, 1985).
- Gray, Richard. *The Life of William Faulkner: A Critical Biography* (Oxford: Blackwell Publishers Ltd., 1994, paperback 1996).
- Irwin, John, T.. *Doubling and Incest Repetition and Revenge: A Speculative Reading of Faulkner* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1975, expanded edition 1996).
- Karl, Frederick R.. *William Faulkner: American Writer* (New York: Weidenfeld & Nicolson, 1989).
- Ladd, Barbara. *Nationalism and the Color Line in George W. Cable, Mark Twain, and William Faulkner* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1996).
- Longford, Gerald. *Faulkner’s Revision of Absalom, Absalom!: A Collation of the Manuscript and the Published Book* (Austin: University of Texas, Press, 1971).
- Parker, Hershel. “What Quentin Saw ‘Out There’” *Critical Essays on William Faulkner: The Sutpen Family* (New York, G. K. Hall & Co., 1996): 275-278.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*, (Jackson: University Press of Mississippi, 1996).
- . “The Artist as Cuckold” *Faulkner and Gendered*. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie (Jackson: University Press of Mississippi, 1994): 20-47.
- Schmidtberger, Loren F.. “What Clytie Knew” *Critical Essays on William Faulkner: The Sutpen Family* (New York, G. K. Hall & Co., 1996): 200-206.
- Weinstein, Philip M. *What Else But Love?: The Ordeal of Race in Faulkner and Morrison* (New York: Columbia University Press, 1996).
- Wittenberg, Bryant. *Faulkner: The Transfiguration of Biography* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1979).
- 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー』(東京: 南雲堂, 1997).
- (言語文化学科 英語文化専攻)  
(1997. 10. 30 受理)